

2021年度



**第5回  
NUFS&NUAS  
読書コメント大賞  
受賞作品**

## 第5回NUFS&NUAS読書コメント大賞に寄せて

名古屋外国語大学長・出版会長 亀山郁夫

恒例となった読書コメント大賞だが、今年もまたすばらしく質の高い作品に恵まれ、驚きの念を覚えている。とりわけ、大賞を射止めた莫言『赤い高粱』のコメントは、過去、何年かにわたる本コンクールでも、一、二を競う出色のレベルだと思う。若干、ジャーナリストティックな書きぶりが気にならなくもないが、何より文章のメリハリの良さが、高評価につながった。最優秀賞『もし僕らのことばがウィスキーであったなら』では、村上文学との出会いの喜びが素朴につづられており、作品とのまさに「ハルキ」的な距離感が心地よく感じられた。図書館特別賞の川上未映子『夏物語』は、内容性という点では、トップをうかがう出来栄えだが、できれば段落を細かく切らず、一気に書きとおしてほしかった。出版会賞の二点、太宰治『人間失格』コメントは、甲乙つけがたい高いメッセージ性に富む内容である。豆大福さんのコメントは評者の「脱力感」がとてもよく出ているし、ほっとけーきさんのコメントは、読解の深さが行間から窺えた。太宰が今の時代にあっても「古典」たりうることを証する好コメントである。推薦図書館部門賞のプーレスト『スワン家の方へ1（失われた時を求めて）』、4点の奨励賞『舟を編む』『深い河』『酒国』『人間の土地』についてはとくに言及しないが、「読書コメント」というコンセプトへの、型にはまらない自由なアプローチが印象に残った。来年の本コンクールでは、コンセプトそのもののさらなる進化を期待したい。

名作のブレンド - 第5回NUFS&NUAS読書コメント大賞に寄せて

名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館長

藤井省三

今年の晩秋も多くの読書コメントを読みながら、楽しい週末を過ごしました。

学生さんたちによる、私にとって未読既読の名作・新作へのコメントが、私の限られた読書の世界に新味をもたらしてくれるからです。

たとえば村上春樹（1949-）と中国作家の莫言（モーイエン、ばくげん、1955-）とは不思議に響き合う作品を書いておりますが、今回は素適なスコッチ・アイリッシュ・ウィスキーの旅行記『もし僕らのことばがウィスキーであったなら』と、一党支配下における恐怖のグルメを描く魔術的リアリズム小説『酒国』とがブレンドされて、私は紙上で酩酊してしまいました。

名作のブレンドと言えば、今秋、外大出版会より刊行された『囚われて』<sup>※1</sup>は、韓国からエジプト・フランス……とユーラシア・アフリカを横断して南北アメリカまでに到る世界文学短篇集です。来年は同書もコメント対象作の一つとしてみて下さい。

---

※1 沼野充義・藤井省三編（2021）『囚われて（世界文学の小宇宙2）』名古屋外国語大学出版会



大賞

# 『赤い高粱』 莫言（井口晃 訳）

ペンネーム：なつ（中国語学科）

魔術的リアリズム。非現実的な物語を現実風につくり換えた仮想世界。著者莫言が創造したこの世界に私は惹き込まれた。フラッシュバック手法で過去の出来事が語られる構成は、更に読者を幻想的な空間へ誘う。日中戦争を背景とした日本軍と中国農民との間の血腥く、残虐な争い。中国農村の複雑で深刻な地域社会。終始登場する「紅い高粱」の記憶を通し語られるこの世界は、まるで生き地獄のようである。人間の生と死。自由とは？家族とは？愛情とは？人間の根源的な本能欲求について改めて考えさせられた。全巻を読み終えた後、もう一度最初から読み直してほしい。きっと張られていた伏線が明らかになるだろう。様々な技法が用いられたこの作品はまさに魔術的と言える。莫言がこの世界に散りばめたメッセージをあなたはどうか捉え、どう感じるだろうか？あなたはきっと不思議な世界を体感することになる。



# 『もし僕らのことばが ウィスキーであったなら』 村上春樹

ペンネーム e (フランス語学科)

未知のものに対する人間の好奇心は尽きない。そしてその好奇心は宇宙のように遠いものより、身近に感じられるものに対してより強くあらわれるのかもしれない。

この本は日本の代表的な作家である村上春樹が、妻とアイルランドを二週間旅したエッセイである。旅のテーマは「ウィスキー」。

蒸留所の人々の話やパブをはしごしてウィスキーを楽しんだ村上の記憶が綴られている。落ち着いた雰囲気の中に、旅に思いを馳せて若干浮かれているような語りが続く。ほろ酔いな人の横にいと、愉快的な空気が伝染して自分まで楽しくなることがある。どうやら、この本にも似たような作用があるようだ。

私はウィスキーを飲んだことがない。しかしこの作品に出会ってから、スーパーなどのお酒コーナーを通り過ぎるときなんかに、ふとウィスキーの種類をしてみるようになった。あなたもこの本を読んだら私のように、日々の生活の中に新たな好奇心が芽生えるかもしれない。



図書館  
特別賞

# 『夏物語』 川上未映子

ペンネーム 白湯（世界教養学科）

ページをめくった先は、まるで暗く深い森の中だった。出口へと導いてくれる道はなく、目線の先は霧で覆われている。どこからか、こっちへおいでと声が聞こえた。私は迷い、立ち止まった。どの方向へ進んでも、正解ではない気がしたからだ。

迷う私の手を掴んでくれたのは、最後まで自分の信じた道を進み続ける夏子だった。森から抜けるラスト6ページ、夏子と共に見たのは希望と絶望を含む、けれども世界に一つしかない輝きに満ちた光だった。

誰しも一度は考える「生まれてきた意味」を超えた問題が、この本にはある。生命を産み出す残酷さと横暴さを描き、子を産むことの賛否を問う。子を産むこと、親になること、生まれてくること、生命に関わる全てがこの一冊につまっている。

『夏物語』という森を抜けたあと、あなたの世界は色を変える。新しい色で染まる世界をその目に映してほしい。



# 『人間失格』 太宰治

ペンネーム 豆大福 (国際日本語学科)

「恥の多い生涯を送ってきました」と語る1人の男。どんな悪いことをしてきたのだろうと、ひとたびページをめくれば、人間の裏切り・醜さを目の当たりにする。話を読み進めていく内に、男が受ける性暴力、ネグレクトに胸が締め付けられる。救世主などいない世界で、次第に彼は救いを求めて女と薬に溺れていく。「これが人間というものだ、期待するだけ無駄だ」と太宰にささやかれているようだ。読み終えた後の脱力感とまったく異なる。本来人間というものは、嫌な部分からは目を逸らし、隠したくなるものだ。しかし、太宰は違った。面と向き合い、文字化された人間の渇くことない欲望と本性は、私に刺激と衝撃を与える。この、人間の本質をえぐり出す表現は太宰の武器といえるだろう。当たり障りのない日々を過ごす私たちに「人間とは何か？」と73年の時を超えて問いかける。みなさんには彼の見た世界がどう映るだろうか？



# 『人間失格』 太宰治

ペンネーム ほっとけーき (子どもケア学科)

「ああ、人間とはそういうものだな。」

これが全ての感想だった。この本を読んだ者は、共感できる者とそうでない者に二分されると言う。私は間違いなく前者だ。読み終わった瞬間、まるで自分の心が全て代弁されたかのような、なんとも言えない爽快さを感じるとともに、腹の底に沈む重々しいなにかを見た気がした。人間の核の部分を出ている、そう思った。悩みを作り出すのはいつも自分で、より重い罰を科していないと、生きてはいけない気がする。自分という人間が罪人に思えて仕方がない。赤子のままの清い心でいられたら。こんなことを、私も考えたことがあった。人間は生きるために、徐々に醜くなっていく。きっと葉蔵は、太宰治は、それが許せなかったのだろう。それ故、自分という、人間という罪深い生き物に対して、失格の審判を下した。生まれ落ちた瞬間から、人間は誰も、人間という難題を課されているのであろう。



# 『スワン家の方へ1 (失われた時を求めて)』 マルセル・プルースト (鈴木道彦 訳)

ペンネーム shoko (英米語学科)

”失われていく意識を求めて”と、表紙にコメントを残したい。この本を完読するまでに何度初めの頁に戻ったことか・・・。まず、主人公に名前がない。そう、この小説は名前がないまま完結するのだ。この小説は3つの部に分かれている。1部は主人公が幼いころに過ごしたコンブレーでの思い出。次に主人公の大恋愛。最後、3部目に愛が美として描かれている。主人公とは誰なのか。どういった人なのか。私は絶対教えない。聞きたいならばこの小説に聞きいてくれ。これを読み終えた時、あなたはこの世界に入り込み、読み終えることができた達成感と、言葉に表すことのできない感銘を受けるだろう。”失われた時を求めて”、”失われていく意識を求めて”。あなたはどちらを先に求めるか。

## 『舟を編む』 三浦しをん

ペンネーム わき (英米語学科)

辞書がどのように作られるかご存知だろうか。そして辞書にどのようなイメージを持っているだろうか。「辞書は言葉が色々載ってる本」この物語を読んだ僕は辞書に対する認識がその程度だったことを恥じた。ひとつの辞書にどれだけの人が携わり、どれだけの時間が、そしてどれだけの情熱が注がれているのかなんて知らなかった。

言葉の海を渡るその舟こそが辞書なのだ。彼らは真っ暗な言葉の海で藻掻きながら、一つ一つ舟の素材を拾い上げて行く。途方も無い努力の果てに作りあげた舟は決して沈むことの無い、大海を渡るに相応しい舟である。

どの言葉を選ぶか、紙はどのような素材か、文字の大きさはどうするかなど、その全てにこだわった紙の辞書には電子辞書には変え難いものがある。おっと、「こだわる」という言葉は適切ではなかったか。書き直しておこう。僕も荒木さんに叱られてしまう。

奨励賞

# 『深い河（ディープ・リバー）』 遠藤周作

ペンネーム たらちゃん（現代英語学科）

神ということばが嫌なら、別にタマネギでもいいんです。幾度となく、大津のことばが私の心を強く締め付ける。仏教、キリスト教、イスラム教、それぞれがそれぞれの神を信仰して生きている。だけど私は、その神の世界には入りこめない。その世界がよくわからない。なんか虚しくて、呆然と立ちすくんでかなしくなる。私のこころの奥に響いて鳴り止まないもの、そんなものをいつも漠然と求めている。そんな時は、この本と共に、遠藤周作と共に、深くて広い河にゆっくりと浸ってみるのもよいだろう。好きなように浮かんだり、沈んでみたりもするのだ。そうしたら、そのうち何か滲み出てくる。そんな彩りを添えてくれる滲みを、私は今もせわしなく探している。

## 奨励賞

# 『酒国：特捜検事丁鈎児(ジャック)の冒険』 莫言（藤井省三 訳）

ペンネーム はる（中国語学科）

権力者が“赤子を食べている”との情報を聞つけ、潜伏調査を行うため向かった酒国市にて主人公が事件を追いつつ酒色に溺れていく様を描いた推理小説。

複雑な文体と著者莫言特有の魔術的リアリズムを用いた「食、酒、女、殺生」の描写は、読者を混沌とした酒国市に拉致する。この混沌さは読み進めるほど強くなり、徐々に現実と虚構の狭間に引きずり込まれ、自身が一体何を読んでいるのかさえ分からなくなる。しかし、奇怪千万にして背徳的な美しさが感じられるカニバリズムの表現と残酷な殺生の描写は、嫌悪感を超える猛烈な好奇心を掻き立て、ページをめくる手は止まらない。

読者が一心に求むは、果たして真に赤子を食べているのか。この謎を解明したく混沌を突き進む。読んだものだけがたどり着く莫言の世界。

この混沌とした世界を共有し、ともに『酒国』を暴く相棒をここに求む。

奨励賞

## 『人間の土地』

### サン=テグジュペリ（堀口大學 訳）

ペンネーム れいや（子どもケア学科）

枯木に花咲くより、生木に花咲くを驚け

江戸時代を生きた思想家、三浦梅園の言葉である。

ごく稀な奇跡の中に、驚きや感動を見出してしまいがちだが、足元の出来事に驚き、感動することができれば、より豊かになるのではないだろうか。

想像力が、人と人をつなげる。

サン=テグジュペリは、職業パイロットとして飛行機を飛ばしていた。フライトを控えた夜、一つのランプを携えて砂丘に座っている彼は、蜚蜉がランプに触れたことを感じ、こう考える。

「無人島の波打ち際に漂流物が流れ着くことは、遥か遠くに嵐があることを伝えている。それと同じように、この蜚蜉は、熱砂の嵐を伝えている。そして今頬を撫でたそよ風は、その嵐が届く最後の限界である。そして僕はこの嵐の中に飛び立つかもしれない。」

奥深くの砂漠にいるはずのない蜚蜉。彼は、とても細かなヒントに、大きな動きを感じ取った。

空を飛んでいた彼の思考の断片から、あなたは何を感じるのだろうか。